

イケチョウガイの貝殻でどのような新表現が可能か。 「泡」と「雪」の試行錯誤。

真珠を採取した後、殆どが廃棄されてしまうイケチョウガイの貝殻。この貝殻の粉末を溶解したガラスに混ぜ込み新たな表現を模索する開発を、ガラス作家の五十嵐智一氏と共に進めています。進めるにあたり、ガラス内に発泡する「泡」の表現と、細かな貝殻の粉末を器にまといわせ、まるで「雪」の表現ができる可能性が浮上してきました。



イケチョウガイの貝殻粉末を
吹きガラスにまといわせる。
雪のような模様が現れた。

琵琶パールの養殖を営んでおられる齋木産業株式会社の齋木勲さんより頂いたイケチョウガイを砕いて粉末にし、ガラスに混ぜて、どのような表情が出るかガラス作家の五十嵐智一さんにトライして頂きました。貝殻の粉をガラス硝材に混ぜて860℃で溶解したところ、細かな泡が多く発生。この細かな泡の表情をガラスの中に封じ込めてはどうかについて路線を検討しました。溶けたガラスの時間による温度変化で泡の出方が不安定となり、工場による量産では不具合が多く発生するということで見送ることにしました。



貝殻の粉をガラス硝材に混ぜて作られた試作。
右側に泡の出方が偏っている。

もう一つの試みは、溶けた透明なガラスに貝殻を細かく砕いた白い粒子が可視化できるよう表面にまといわせて雪のように表現するものです。いくつかの試作を重ねていった結果、こちらは雪がちらついているような雰囲気の出上がりになりました。この表現を踏襲し、カラーバージョンも検討。インディゴ、浅葱色、藍鼠色などで試作し、貝殻の粉を多めにまとい寄せた白色のバージョンも加えて、検討していくことになりました。これを経て、次の工程で用途や形状の決定に進んでいきます。

(つづく)



イケチョウガイの貝殻の粉末をまといわせることによって作られた試作のガラス。
これらをもとに、今後は用途や形状の決定を進めていく予定。